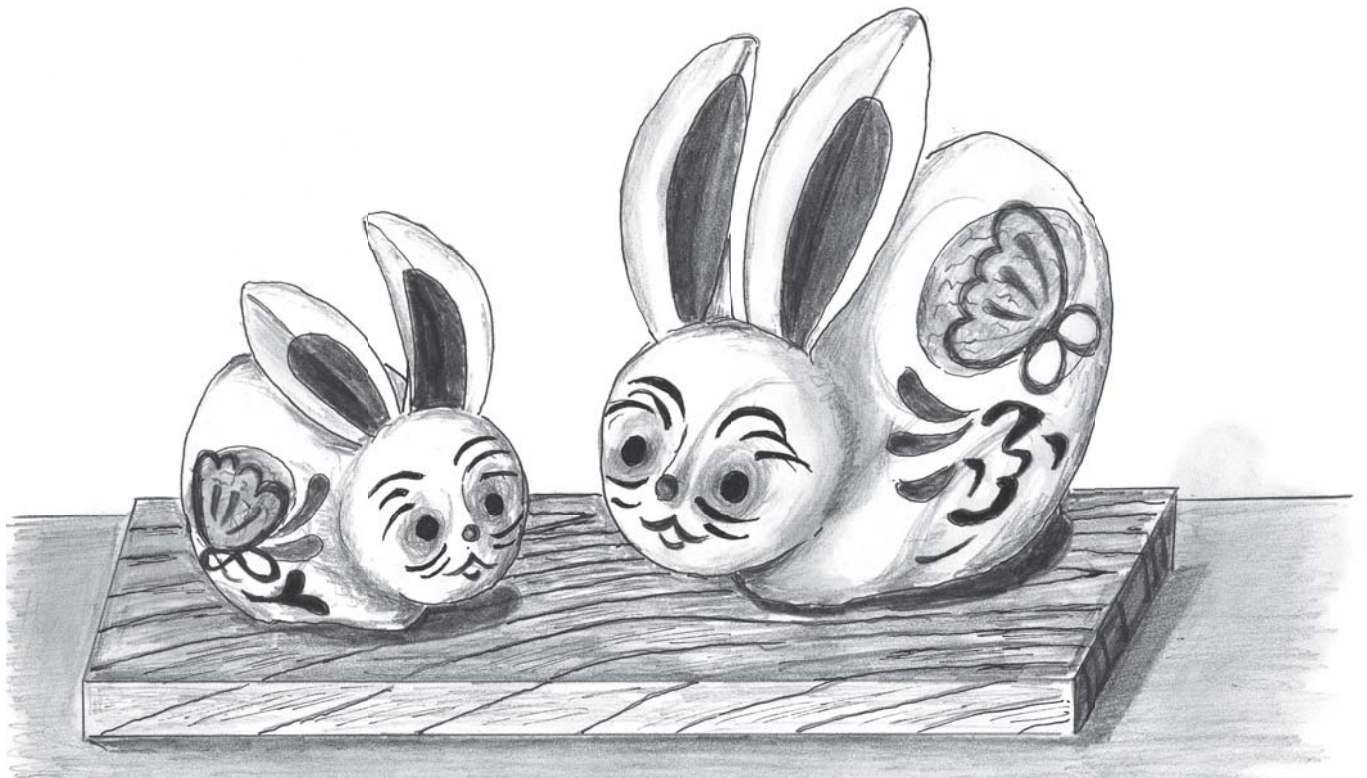




法人こおりやま

2011. 1 第391号

発行所 郡山市虎丸町14番2号 社団法人郡山法人会 (024-933-7777) (FAX925-1971)
 発行人 樽川次男 編集 広報委員会 印刷所(株)ヨシダコーポレーション



**郡山法人会のホームページから
無料でセミナーが視聴できます**

<http://www.koriyama-hojinkai.or.jp/>

経営、人材育成他、受講したい多彩なコンテンツの中から好きな物だけを選び、24時間アクセス可能で、時間を気にせず何回でも受講できます。

会員ID:1101
パスワード:1005

目次

2011年経済景気展望……………	2
誰もが光輝く能力を授かっている……………	4
『新しいこと』への挑戦……………	6
行動する法人会……………	7
カメラトピックス／郡山税務署広報……………	8

2011年 経済景気展望

経済評論家
松本音彦

新年を展望して、これまでの難題はそのまま尾をひく状況である。

「失われた20年」が過ぎ、ようやく谷間にかすかな光が射しつつあるものの、まだ暗雲が晴れる段階ではない。

この暗雲を列挙しておく
と、デフレの長期化、失業率の高止まり、財政難、マイナ
ス要因としての円高……、加
えて内政の混迷、”外”では
朝鮮半島をめぐる緊張。

いずれも、速効薬を欠く
難題だ。

引き続き世界情勢のキー
ワードは、広範な分野にわた
る「不均衡」。

これが(日本を含む)各国
通貨の相場を攪乱させる。

国際的にもっとも大きい
不均衡は、米国vs中国の通
商関係の偏りで、中国の大貿

易黒字・米国の同大赤字↓
ドルの凋落の一因↓中国・人
民元切り上げ圧力を生む。

周知のとおり、米国と中国
は切っても切れない相互依存
関係にあるが、両国の関係は
ときに緊張し、日欧はじめ各
国の懸念要因になる。

残念ながら、G2と呼ばれ
る米・中2国の微妙な関係を
本格的に調整できる国と経
済圏は、まだない。

日本の場合は、政経両面でむ
しろ国際的地位を低下させ、
中・露との領海問題に十分な
対応をしかねている状態だ。

要諦は強力な戦略の あるなしだ

さて、足下の国内問題…。

■デフレ長期化

デフレが終息するまでの期

間は長い(いわゆる「ロング・テ
イル」)。

物価を軸に対照的な現象
ながら、インフレには強力な
対策(利上げ・量的引き締め
があるが、デフレでは決め手
を欠く(とくに成熟国では)。

超低金利策・過剰な量的
緩和策をとつても、根底にあ
る需要不足の解消に効かな
いことは見てきたとおり。

世相を暗くする第一要因
の雇用悪化は、デフレ現象の
なかでもっとも始末が悪い。
需要が委縮している限り、
達成は至難である。

関連して、「成長戦略」不在
論に触れておくと、問題は、
一に強力な戦略のあるなし
だが、あってもそれが有効に
作用するかどうかは別問題
だ。

成熟国(端的に欧州諸国

だが、日・米もか)では、高成
長はおろか、ここ半世紀の平
均的成長も難しいのではと思
われる。

ここで、あえて日本経済の
低迷と政治の関係に一言。

確かに現内閣の対応は
”弱い”が、現野党側が政
権を担っていたとして、結果
はそう変わらなかつたのでは、
といえなくもない。

同じく、日本経済を今の
姿にした責任の大半は”歴
代”政権にあるのではないか
という見方は、政局のカゲに
隠れているが芯を突いている
と思う。

■財政難

今や世界的で、欧州の弱
小国のデフォルト懸念はその
一端にすぎない。

余談だが、10年夏にギリシ
ヤ・イタリア・スペインを歴

訪した知人によれば、ストが
あつても巷の表情は意外に明
らかつた由。

国家が破産状態に陥つて
なお、人々はたくましく生き
ている。

今日、日・米もアイルラン
ド問題などを他人事にみて
いる場合ではない。

日本の累積赤字は862
兆円、国民1人当たり約70
0万円。

政府査定で”均衡”は10
年先。

米国もきびしく、州ではあ
るがGDPがカナダを上回る
カリフォルニアの場合、歳入・
歳出バランスの悪さはギリシ
ヤ並みとされる。

現実には現実として、こうい
う状況が経済施策の足かせ
になり、筆者が賛同しかねる
「政策偏向」をもたらす点が

問題だ。

本来の経済施策の2大柱の財政と金融で、財政政策は「仇役」扱いになり、いわば片手運転の金融策(利下げと量的緩和)一辺倒になる。

結果は、「過剰流動性」現象——俗な表現ではカネのジャブジャブ状態を招く。

それでも効けばいいが、需要創出・雇用増にたいして効かない。知人の医師の話で、骨の劣化著しい人体にカルシウム剤などを投与しても、吸収される比率は微々たるもの。これに似ている。

確かに、世間に出回るカネの潤沢さは、ある程度、経済の七難を隠すだろう。

だが、日銀が「リート」(上場不動産投信)あたりを買い上げて放出したカネが、どこまで真に資金を必要としている分野に流れるか、?がつく。一方、《政府の年金運営の苦しさvs大企業「内部留保」が約200兆円》という不均衡がある。

この「内部留保」の相当部分は当面の使い途がなく、

実上「デッド・ストック」化しており、その有効活用は官民双方が真剣に取り組むべき課題だろう。

なお、財政問題に本格的に切り込むには、「税制」の広範な改革が欠かせない。

が、仮に消費税だけで凌ぐとすれば同税率を25%以上に引き上げざるをえず、

他の増税を迫られる。そこで私案だが、財政支出から逃げずに、累積債務862兆円の数%に当たる約50兆円を「国内インフラ整備」

に投入する策はどうか。財源は、やり方次第(超長期「建設国債」の発行など)でなんとかなる。

とにかく、防災・防震面の国内インフラは疲弊していて、その整備は緊急課題だ(この点、米国も同様)。

投入する50兆円は即雇用増加につながり、景況に好作用を及ぼし、歳入増をもたらす。

昨今、官民挙げて「海外インフラ」に執心だが、優先順位を誤ってはいけない。

ここで、最近、政府が「財政再建」一時棚上げのアドバルーンを掲げた点に注目。あとは、実施に踏み切る勇断次第だ。

さらなる悪化を回避し、収益好転へ

■円高

「ジャパン・パッシング」(日本軽視)がいわれて久しいなかでの円高は、まことに皮肉な現象だが、相手通貨の米ドル・ユーロの弱さの反映と理解すべき。

米ドルの場合、世界的な「ドル離れ」機運(ドル保有率を下げる動き)。

その代表が中国で、対米輸出で膨張するドル資産(米国債を含む)の割合をさらに増えないように抑えるは一過性ではない。

「相対的」安全度で「円」が「金」に準ずる地位に浮上した背景には、ベトナム戦争以来の「ドルばら撒き」が大きい。

それに、何年来いわれてきた米国の「双子の赤字」(大貿易赤字・大財政赤字が重なり、ドルの信用低下は基調化した)。

破綻寸前のGMを再生させたように、米国の経済活力はまだ健在だが、通貨ドルの凋落は今後も尾をひく。

日本としては、この先、円高メリットを積極的に評価すべきである。円安による利益増加は、真の国富の充実ではない。躍進・新興国、先進国に入るオーストラリアなど、「自国通貨高と経済成長を両立させて」おり、原理的にもコレが本道なのだ。

円高阻止のための「為替介入」は「少々」の効果はあるが、決定打にはならない。第一、《世界の為替市場では1日に約4兆ドル(320兆円)のカネが動く》、そこに2〜3兆円投じても勝負にならない。

なお、各国が(目先の国際競争上)競って自国通貨安を志向する「通貨安競争」は、長期化に限度があるものの、しばらくは続くだろう。10年11月のG20サミットでも、この解消策は具体化しなかった。

こうした流れに関連して、新「バスケット通貨」構想(ゼーリック世銀総裁案では、ドル・ユーロ・円・ポンド・人民元の5通貨に)金を含める、が浮上してきたことに注目したい。

5通貨にする点は、ドル・リスクの分散。金を絡ませる点は、「ドルばら撒き」の抑制を狙ったもの。

■11年度企業収益の基本パターン

まず、マクロ経済指標が(雇用を除き)緩やかに回復するが、企業収益はマクロ以上に好転する可能性が高い。その基調は「売上は横ばい、乃至微増にとどまるものの、コスト・ダウンを核に収益は売上げ増以上に、好転する」。このパターンはデフレ・不況長期化過程での定型だが、さらなる悪化が回避される可能性を素直に評価したい。

誰もが輝く能力を 授かりている！

● 神渡良平

たかが左官屋、 されど左官屋

中小零細企業は大資本の攻勢の前に立ちすくみ、なすべがないように見える。

また社会全体の経済の冷え込みは中小零細企業にもろに響き、業績低下に歯止めがかからない。

しかしそうした状況の中でも、確実に業績を伸ばしている意気軒昂な企業集団がある。

彼らと私たちは何が違うのかを探ると、大きなヒント

を見せてくる。

まず第一に取り挙げるのは、飛騨高山の左官職人の集団である(株)職人社秀平組を率いる挾土秀平さんだ。

現在、挾土さんは新首相官邸の壁塗りを任される傑出した左官職人になっているが、一昔前はモルタル壁を塗るだけの普通の左官職人に過ぎなかった。

挾土さんは自問した。

「おれは一メートル平米いくらで請け負って仕事をしてい

るただのモルタル塗り職人でしかない。しかしいつまでもこんなことをしていいのだろうか。おれしかできないような仕事はできないのだろうか」

誰にでもできる賃労働をしているのが耐えられなかった。

自分には独自の何かができないのだろうかと模索していたとき、目に飛び込んできたのが土壁だ。土壁は青色、赤色、白色などさまざまな色の土を使って、稲やモミジなどを織り込み、コテでさまざま

まな文様を描き上げており、

その表現力の豊かさには留まるところがないように思えた。

挾土さんは休みになると山に入つてさまざまな色の土を採取し、土壁塗りの技術を磨いた。

そして面白い作品ができあがると地元の仕事場に持ち込んで売り込んだ。

しかし建築はコスト削減、工期短縮などの必要から、すべては工場でプレカットして現場ではボルトで取り付けて

いくだけになっており、湿式の土壁の需要はなかった。

食べていけないから、モルタル塗りの仕事を続けながら、新しい分野を執拗に開拓した。

挾土さんの表現力に興味を抱いた工務店が飛騨高山 デイベア・エビレッジの仕事を発注した。

この作品が評判を呼び、次は高山の中心地に立つカフェ兼ギャラリーの外壁を任されてまた注目された。

こうして徐々にレストランやバーの壁を塗る仕事が増えるようになり、大きな仕事も任されるようになった。

平成十四(二〇〇二)年、新首相官邸の壁を任された。

そこで歴史の重みを表現しようと、地を突き固めて地層を作り、重厚な壁に仕上げ、高く表現された。

平成十九(二〇〇七)年には、東京・日比谷にある高級ホテルであるザ・ヒンシユラ東

京のフロントの壁や結婚式場、それに六メートルもある階段の吹き抜けの壁を任された。挾土さんはここに青い土で宇宙を描き、金粉を吹き付けて、大空にまたたく天の川を表現した。

その翌年には前述したように、サミット会場となったホテルに、世界の首脳たちがくつろぐ部屋に国宝玉虫厨子を安置し、それを引き立たせるために正倉院の校倉作りを連想させる壁を作った。

こうして職人社秀平組はわずかに十数名の小さな集団ではあるが、その表現力の豊かさにおいて、発注元の大手ゼネコンには欠かせない存在になっていった。

人は誰でもその人にしかない持ち味を授かっている。

企業規模の大小を問題にする必要はさらさらない。人は人、自分は自分だ。自分の本場で自分の能力を開花さ

せるよう努力したら、すごい仕事ができるようになっていくのだ。

「靴下がおれを選んだのだ」

現在では全国に二百九十店舗もの靴下専門店「靴下屋」を張り巡らせ、平成十二(二〇〇〇)年には業界で初めて上場するに至り、年商百六十億円を稼ぎ出している越智直正タビオ会長は、自分の仕事を天命と捉えて切磋琢磨することの大切さを説く。

中卒で大阪に就職せざるを得なかった越智さんは、学歴も親の七光りもなく、いつもグズだ、アホだと叱られてばかりいたので、自分で自分を励まし、奮起するしかなかった。

明治維新の三傑と言われた木戸孝允の次の漢詩はそのころ暗記したものである。

驚馬遅しといえども、積

載多ければ

高山大澤もまた過ぐるに

堪えたり

請う看よ、一掬泉巖の水

流れて汪洋、万里の波と

作るを

(愚鈍な馬だとしても、たくさん積み、高い山も越え、大きな川も渡ることができよう。よく見よ、わずかひと掬の水であつても、流れ流れて汪洋とした大海となり、万里の波となる。悲観することはない。奮起するのだ)

その越智さんは昭和四十三(一九六八)年、二十八歳のとき独立し、自分の会社(株)ダンを興した。

昭和六十二(一九八七)年九月、四十八歳の越智社長はアメリカの流通業界の視察団に加わった。

ニューヨークをはじめ、東海岸の諸都市を回り、フロリダ州のオーランドで視察が終わり、デイナーショーにでかけた。

その屋上の上つて見ると、

三六〇度どの方向を見ても

山が見えない、大パノラマが

広がっていた。

折しも金ダライのように

大きな夕日が大平原の彼方

の地平線に沈むところだ。

「オオッ！」と感動の声を

挙げて見入っていると、夕

日から光線が射ってきて、越

智社長に飛び込んできた。

「お前が靴下を選んだので

はない！ 靴下がお前を選んだのだ」

越智社長はどぎまぎした。

折しも韓国や台湾から安

い靴下が上陸し、日本の靴下

業界は倒産が相継ぎ、氣息

奄々という状態だったのだ。

とはいえ、越智社長は自分

の会社を維持していくのに懸

命で、業界の行き先を考え

る余裕はなかったのだ。

「そんなことを言われても

おれより優秀な人材はいく

らでもあるじゃないですか」

「しかし、寝ても覚めても靴

下のことしか考えていない奴

はお前しかおらん！」

越智社長は覚悟を決める

しかなかった。

「これからは自分の会社だ

けではなく、日本の靴下業界

を背負って立ちます」

これが越智社長の立志元

年となった。一企業のこと

以上に、業界のことを考えて手

を打つようになった。そしてハ

ーバード・ビジネススクールが

ケーススタディに取り上げた、

店頭の売上情報を製造に反

映させるサプライ・チェーン・

マネジメントを作り上げ、文

字通り、靴下業界の救世主

になった。

「驚馬といえども積載多

ければ……」と口ずさんで自分

を励まし、「靴下がおれを選

んだのだ」と奮起したればこ

そ、成し遂げることができた

偉業だった。

すべては意図することから

始まる。心願を持つことほど

大切なことはないのだ。

新しきことへの挑戦

未来事業株式会社代表取締役・経営プロデューサー 吉岡 憲章

本年は「兎の年」。猛々しい寅の年を終えて、落ち着いて品のある年になるといわれております。

また、卯年生まれの人はい人情深くまめな性格で、人から好かれるとともに優れた判断力の持ち主”のようです。

さらに、ウサギの耳はとても敏感で、小さな話し声も決して聞き逃さないようですので、ウサギに負けな

いように、世の動きや業界の情報に積極的に耳を傾けましょう。

さて、去年は政権交代をしたものの、沖縄問題や中国の尖閣諸島漁船問題に対する政府の対応に、多くの国民は幻滅感を味わいました。

経済でも、急激な円高・株安現象が景気回復の足を大きく引つ張りました。

大企業はそのような中でもリーマンショック以前までに復活している例も見られるようになりましたが、

中小企業はまだ不況トーンネルの先が見えない状態にあります。そのような中で迎えた新年、経営者の皆様も”今年のが社の抱

負”を考えておられることと思います。しかし、世の中が前述のように閉塞感に覆われていますと、自然

に自分自身も内向きになり”小さく、無難さを求めた経営方針”になってしまいます。

こんな時こそ、これまでの自分や会社を脱皮するよ”うな”新しきこと”の創造を目指して挑戦することが肝要です。

”新しきこと”とは何か。難しく考えることはありません。

それは、これまでの柱となっている事業に、新しい事業や業態を加えるということであつたり、新しい商品やメニューを開発することであつたり、新しい販売ルートの開拓や新しいお客様と取引できるようにするという事です。

もちろん、現在の事業や顧客から手を抜くということではありません。

”今”をさらに充実させることは言うまでもありません。ただし”今”はすぐ”過去”になります。

過去になつたとたん”償却”が始まり、縮小していきます。(私はこの現象を”顧客償却”と名付けました)

したがって、経営者は現在の事業の深耕を図りながら、新事業や新商品、新顧客などの”新しきこと”の実現に目を向け進んでいかなければ、わが社の将来の成長は望めません。

それでは、どのような点に留意すれば新事業や新業

態、新商品の実現が可能になるかということについて考えてみましょう。

ポイントは次の2つです。まず、その”売りもの”の特長が明確であるということ。その究極が、”オンリーワン”です。

どこにでもあるようなものではなく、コスト競争という厳しい競争に巻き込まれてしまい、将来わが社の経営の柱になれるはずはありません。

日本で一つしかない、ということを追い求める必要はありません。業界で唯一、地域でただひとつであつてもよいのです。

事業や商品のある部分だけが”オンリーワン”であつても十分です。

ただし、その特長は独りよがりなものでは通用しません。

お客様から”なるほど”と受け止められるような明確な特長を備えることです。

2つ目は経営者の”思い”の強さです。

”新しきこと”は、当然のことながら未経験への挑戦です。

何としてでもやり遂げる、という執念のようなものがないければ実現しないでしょう。

”水は低きに流れ 人は易きに流れる”と言われていのように、誰もが難しきことへの挑戦は避けたくなるものです。

”今”を続けることはそれほど難しくはありませんが、”新しきこと”への挑戦にはそれを完遂する熱意と覚悟が不可欠です。

もしかすると、その過程において泥沼があつたり、大きな壁が待ち受けていたりすることもあります。

そのような予期せぬ障害があつても、確固とした強い”思い”があれば実現することが出来ます。

”オンリーワン”と”思い”を武器にして、ぜひ、今年”新しきこと”が一つでも実現できますことを祈念申し上げます。

行動する法人会

—平成23年度税制改正に関する提言—

全法連では、平成23年度税制改正に向け、政府・政党等に対して提言活動を行いました。



8月24日

財務省

税制改正要望に関する団体ヒアリング

財務副大臣 **峰崎 直樹** 氏

財務大臣政務官 **古本伸一郎** 氏

他

民主党

財務金融部門会議

座長 **古本伸一郎** 氏

網屋 信介 氏、階 猛 氏

田中 直紀 氏、渡辺 義彦 氏

他



10月5日



11月2日

自民党

財務金融部会

部会長 **林 芳正** 氏

野田 毅 氏、今村 雅弘 氏

石井みどり 氏、佐田玄一郎 氏

阿部 俊子 氏、丸川 珠代 氏

公明党

税制調査会、財政金融部会

会長 **斉藤 鉄夫** 氏

部会長 **竹内 譲** 氏

石井 啓一 氏、大口 善徳 氏

竹谷とし子 氏



11月19日

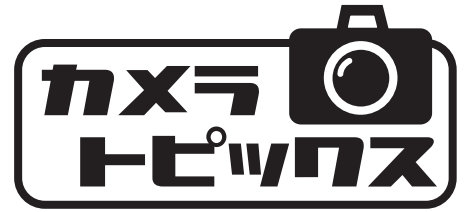
この他、参議院の比例代表選出議員に対し提言書を送付するなどの提言活動を実施しました。



22・12・8 経営道場「経営改善計画」
講師：石田彰氏



22・11・10 経営道場「経営戦略」
講師：伊野勝彦氏



経営道場



22・11・11 小学生の税に関する標語・絵はがきコンクール受賞者



22・12・24 街頭募金活動



22・12・21 骨髄バンク協議会へ寄付をする岡部女性部会長と渡辺監事

郡山法人会会員の皆様へ

郡山税務署

御社の社員の皆様への確定申告情報提供のお願い ～申告書の作成もできる国税庁ホームページのご案内～

国税庁ホームページ(www.nta.go.jp)には、「確定申告特集ページ」が開設されていますが、その中の「源泉徴収義務者の方へ」に給与所得者の皆様へのお知らせが掲載されています。最近では会社員の方でも確定申告をする方が増えており、そのような方に、申告書が簡単に作成できる「確定申告書等作成コーナー」のご案内をするものとなっています。

つきましては、御社の社員の皆様に必要な方法で情報提供していただくようお願いいたします。

- ① 国税庁ホームページのトップページにある「確定申告特集ページ」のバナーをクリック
- ② 「源泉徴収義務者の方へ」をクリック
- ③ 給与所得者の皆様へのお知らせをダウンロード(7種類のデータの中からお選びください。)
- ④ 回覧、配付、メール配信、電子掲示板への掲載などの方法により、社員の皆様へ情報提供